

講義録

異界からの帰還

— 神話・ファンタジーから考える —

飯

謙

Otherworldly Journeys in the Ancient Near Eastern Myths and Modern Fantasies

II Ken

0. はじめに—神話とは？

こんにちは。飯でございます。わたしの専攻分野はもともとキリスト教の神学と旧約聖書学です。旧約聖書はキリスト教誕生以前の時代を扱う文書で、人々がどのようなことを思索し、模索していたのか、どういうことを大切だと思ひ、スルーしていたのか、そこから聖書の思想がどのように形成されたのかということを考えています。連続と非連続という言い方もしますが、誰かの考えを継承した人、あるいは中断された思想を突然何百年かたってから再発見した人—それらを掘り起こす。その中からキリスト教につながったもの、そうでなかったものを検証し、キリスト教がどのような思想的素材から形成されているか探求する—そういう勉強をしています。さらにその関連で、紀元前の古代エジプト、メソポタミア、ペルシア、ギリシア、ローマなど、周辺文明圏からの影響についても関心をもっています。

これら、古代の文化圏の多くは、神話の形態を用いて自らの考えを表明してきたと申せます。ギリシアのプラトンでも、合理的な論理性の中で議論を展開してきたと思えますが、しかし、その時代も、基本的に皆、神話の世界の中を生きていたと申せます。その中で、自分の考えを整理し、構築し、表明してきました。

今回は「異界」の問題が取り上げられますが、わたしは神話やファンタジーを通して考えてみます。もっとも神話とは何であるかということになりますと、簡単ではありません。松村一男が『神話学講義』（角川書店、1999年）で、現代人が神話をろくに定義づけもしないで、無定見に、都合よく、また身勝手に使っているという意味のことを述べています。松村は研究史を振り返り、神話という用語を起源神話（エリアーデ）、英雄神話（キャンベル）、幻想（ストレンスキー）などに限定的に使う人がおり、用法が錯綜していると指摘します。こういった混乱は確かにあります。

手近な国語辞典を見ますと、まず「自然界・人間界のおもなできごとを、すべて神の行為の結果として説明する説話・伝説」と書き、それに並べて「正し

い根拠のない俗説」とあります（三省堂、第二版、1980年）。できごとを神に関連させる説話と書いた後で、「正しい根拠のない」、すなわち、因果関係不明のままで、人々が絶対のものと信じ込んでいた事柄と続ける。「土地神話」「安全神話」などがそれにあたるかもしれません。それとともに「嘘」との記載も見られます。宗教に携わる者としては、こういった「勘違い」という意味合いで「神話」という言葉は使わないでほしいところですが、しかし、現実にはそのように解されています。もともとはギリシア語の「ミュートス」という単語で、myth という英語（神話）のもとになりました。ミュートスも事典を見ると（古川晴風編『ギリシャ語辞典』大学書林、1996年）、諺、物語、架空の話、目的、意図、筋、神話、伝説、寓話といった意味が出てくるので、「嘘」や「勘違い」も原意に近い理解とも申せます。史実ではないのだということです。紀元前4世紀のギリシア人エウエメロスも、神話に登場する神々というのは、本当の神ではなく、少しばかり能力が秀でた人間のことと述べていると伝えられます。

グリム兄弟は、簡単に「神々の話」と説明していますが、先ほど紹介しました松村は、①神話は物語（史実、共通世界での出来事とは限らない）、②集団や社会によって「真実」と承認された内容、③作者と年代は不詳、といったことを特徴としてあげています（前掲書、pp.12f.）。「神話は物語である」。つまり史実とは限らないと、はなから申します。そして、「集団や社会によって真実と承認された内容」を含んでいる。作者と年代は不詳。これは、要するに人々の間で徐々に形成されてきたものである、と。ファンタジーは誰の創作か、はっきりしているわけですが、神話は作者不詳である。

嘘か本当か――。わたしたちの周囲には二分法で解決しない問題が山ほどありますが、それでも答えを見つけていかなければならない。わたしは松村の言葉を参照して、「共同体において共有された価値観の伝達、継承に貢献する物語」と仮の定義づけをしています。神話はある点では、人々の間で共有された価値観が含まれている話であり、その伝達に貢献する話である。ファンタジーは、その意味では、共同体レベルではなく、個人レベルの価値観になろうかと

思います。

これを考えたきっかけは、『指輪物語』の作者として有名なロナルド・トールキンが『ファンタジーの世界—妖精物語について』(On Fairy-Stories) (福音館書店、1973年 [評論社、2003年]) という講演集で述べていたことです。彼はこの中で、ファンタジーの本質として「実際に起こること」よりも、「多くの要素の複合体…普遍的…人間だけしかもっていない…願望」(p.85) をあげています。彼の評伝を書いたハンフリー・カーペンターは、トールキンがファンタジーを書こうと思った理由として、イングランドで共有されていた神話がないことをあげています (『J.R.R. トールキン—ある伝説』評論社、2002年、pp.111f)。トールキンは上であげた講演集でその「願望」を、「回復、逃避、慰め」という三語にまとめています。わたしなりに要約すると、「回復」は見るべきものを取り戻すこと (p.120)、「逃避」は不条理に迎合しないことで、逃亡や逃走と区別される (pp.124ff)、「慰め」は幸せな結末を指し (p.137)、健全な「願望」の形成につながる。わたし自身がトールキンの作品を読んで思うのは、彼が、共有されるべき価値観や真理として、「正義」の問題を扱おうとしているということです。

少々脱線してしまいました。トールキンが神話の代替作品としてファンタジーを書いたというあたりに、わたしたちが神話や民話に取り組む大切なポイントが潜んでいると考えております。一步踏み込んで、それを読み取る努力をする。はなから、神話など無意味だという感じで退ける人もいるわけですが、一步踏み込んで、共有すべき真理がどのように提示されているのか、読み込むよう努めたく思います。

本日は、まずは時代順ということになりますが、古代メソポタミアとギリシア神話、次にうまく話せるかどうか心許ないところではありますが、現代にもなじまれているファンタジー、最後に聖書のストーリーから異界との接触の問題を取り上げて、わたしたちが日ごろ見過ごしているリアリティーを発見できればと願っております。

1. 古代オリエント・古代ギリシアの神話から

1.1. イナンナの冥界下り（シュメール神話）

まず一番最初は、古代オリエント、古代ギリシアの神話からということで、まず『イナンナの冥界下り』というシュメール神話を取り上げたいと思います（杉勇、尾崎享訳『シュメール神話集成』ちくま学芸文庫、2015年、pp.43-75）。イナンナは美の女神、金星の女神とも呼ばれるようになります。後のローマ神話のウェヌス（ヴィーナス）とも関連づけられます。

シュメールとは、メソポタミアに一番最初に定住したと言われる人たちです。どこから来たのか、実ははっきり分かっていませんが、ペルシア湾の東の方からやってきたらしい。ペルシア湾岸あたりに最初に入植して農耕をし、神殿を造営し、都市国家を造っていったのがシュメール人。この人たちが楔形文字を考案して粘土板に神話や歴史伝説を書き残しました。とりあえずこれが今日まで残された世界最古の文学の一つと評せるでしょう。その神話の中に冥界—異界へと出かけていったイナンナ女神のストーリーがあります。

シュメール神話には多くの神々が登場します。普通三大神として、アン、エンリル、エンキがあげられます。アンは天上の神。創造にもかかわったので、一番格上の神ということになります。エンキは、「エン」は「アン」と同じく「神」、「キ」は「地」—「この世」を指します。「キ」というのは便利な言葉で、海も陸も指します。人が歩いたり船に乗ったり、行くことのできる場所が「キ」です。エンキは、直接的には海も含めた大地の神。そしてエンリル。これがなかなかわかりにくいのですが、手に入りやすい古代メソポタミアの概説書には、空気と書いています。ですから、天空があって、大地があって、空気があると、分かりやすくも感じますが、わたしは実は講義では、いつもこれは「気」と思ったほうが良いと申します。エンリルは、空気という少々狭すぎる。歴史を動かす力、人間を動かす力としての「気」。後にはエンリル神が権力をもつようになります。この話を長々しますと時間がなくなってしまうので、このぐらいにしておきます。

それとは別に、天体神としてウトゥという太陽神、スエンという月神、そしてイナンナが金星の神です。なぜか金星の神が特別視されます。エジプトでは太陽神が力もちます。それは農耕で大切な役割を果たすからですね。メソポタミアでも同様です。月神は、暦に大切な役割を果たします。日本でも、今日も陰暦で生活する方はおられるわけですが、人間の身体的・生理的なペースには月の暦のほうが合うのだというのです。そして金星。確かに美しいし、何か人間の美意識とかやる気も出てくるのかなとも思えますが、なぜ金星だけが他の星を抑えて三大天体神に数えられるのか、不思議な気がいたします。太陽に近いからかもしれません。私見ですが、今からお話しする冥界からの帰還が重要な動機になったのだらうと考えられます。

このイナンナ神の物語はシュメールの粘土板に楔形文字で書かれ、19世紀から20世紀にかけて、ウルやニップール、ウルク、ラルサといった古代メソポタミアの主要な古代都市で見つかっています。400行ほどで、最古の写本は紀元前第2千年紀前半（前1800年頃）のものと言われます。ところが、文書の中に大体紀元前2300年代の状況に言い及んでいる箇所があるので、創作年代はもう500年ほど遡ります。つまり最古の写本が筆記されたのは紀元前1800年頃だが、実際に創作されたのは、もうその500年ぐらい前の紀元前2300年頃になるのだらうと見られます（前掲書、pp.256-261参照）。とにかくシュメール語で書かれたものです。

その後、これは『イシュタルの冥界下り』という表題でアッカド語に翻訳されます（杉勇編『古代オリエント集』筑摩書房、1978年、pp.191-195）。こちらは簡略版なのですが、広く読まれている。広く読まれているというのは、写本もたくさん出てくるし、翻訳も出てくるので、各地でよく読まれていたという意味です。

次のような話です。イナンナは、地上の権威や榮譽を捨て、姉エレシュキガルの支配権篡奪のため、七つの神通力（シュメール語で「メー」）と七つの装飾品（王冠、かつら、王じゃく、首飾り、胸飾り、腕輪、ブローチ）をもって天から冥界に下った。降下前に従者ニンシュブルに、自身の冥界行の間、毎日

自分のために祭儀を執行せよと申しつけ、さらに三日で戻らない場合はエンキ神に相談するよう申しつけます。イナンナは冥界への七つの門を越えて進むが、その度に門番に装飾品を一つ一つ渡す。ついにエレシュキガルのもとに到達するも、裁判で死を宣告されてしまう。地上のニンシュブルは三日後にエンキに相談に行った。エンキは命の草と命の水を持たせ、ガラトゥルとクルガルラを冥界に派遣。両者は冥界で死したイナンナに命の水と草をかけ、復活させる。ただ地上帰還のために代理人が必要と聞き、イナンナは夫の牧羊神ドゥムジとその姉の植物神ゲシュティンアンナを冥界に置いて、冥界から帰還した。これにより牧羊神と植物神（穀物神）とが半年間ずつ不在となる。そのため半年間は地上は枯れ野原になって作物が実らず、他の半年は繁殖が滞ることとなった。

シュメールの宗教史を追いますと、元来の三大神アン、エンリル、エンキに代わって、天体神が幅をきかすようになります。具体的には天体神の神殿や神官が政治上の実権ももつようになるという意味で、それぞれの天体神の聖所が栄えてまいります。アンの聖域というのはジグラットですが、荒廃し、三天体神に力が集まります。イナンナ神はウルクという、メソポタミアでもっとも古い町の主神となります。もともとウルクの主神はアンだったので、イナンナに実権が移り、さらにウルクが一番強い町となります。その要因として、イナンナの冥界帰還があげられます。冥界からの帰還が支配の大切な材料になっていくと。冥界—異界が支配権確立の根拠となります。冥界の話をもう少し続けたいと思います。

1.2. デメテル

続いてデメテルの神話を取り上げます。これは古代ギリシアのオリュンポス12神に数えられる豊穡の女神です。父はクロノス、母はレア。両者は古代ギリシアの神統記ではウラノスとガイアに続く第二世代、したがってデメテルは第三世代ということになります。古代ギリシアでは、一番最初にウラノスという天空神。次にクロノスという時間の神。空間と時間ができ、第三世代が支配者

たるゼウスということになります。デメテルはクロノスの娘、ゼウスの姉です。ゼウスは弟ですけれども、両者の間に娘ペルセポネが誕生します。

このデメテルのストーリーは『ホメーロスの諸神讃歌』に収録された「デメテル讃歌」という詩に記されています（沓掛良彦訳、平凡社、1990年）。『ホメーロスの諸神讃歌』は古代ギリシアの神々をたたえる33編の詩からなる作品集で、紀元前7世紀から紀元前2世紀にかけて編まれました。各作品の中でそれぞれの神々に関わる物語が叙述されています。創作年代は不詳ですが、沓掛良彦の解説によれば紀元前7世紀です。ギリシアの文学史では最古の層に属します。次のような内容です。

冥界の王ハデスがペルセポネを誘拐。冥界に連れ帰って、結婚してしまいました。ゼウスは黙認。ゼウスは父ですから、必死でそれを抑えなければいけないのに認めてしまった。デメテルは、それを知って神殿に蟄居してしまう。デメテルは穀物神・豊穡神ですから、世界が干ばつに見舞われた。ゼウスは遅ればせながら娘の返還を命じるが、ハデスの奸計により、冥界の食物を食べさせ、冥界の者としてしまった。結果、1年間の3分の1は冥界に留まり、残りの3分の2は地上で生活。その期間はデメテルの機嫌がよく、作物が実るが、残りの3分の1は実らない。イナンナの物語では半年ずつでしたが、ギリシアでは3分の1と3分の2。こちらの数字の方が、ギリシアの生活実感にかなっていたということなのでしょう。ペルセポネの帰還後、デメテルは大地に緑を戻し、エレウシスという村の聖所で秘儀の主神となります。秘儀と申しましたが、後代の著述家からはカルトに近いものと見られていたようです。

このストーリーでは、女神デメテルが娘を冥界から帰還させ、自らはエレウシスの聖所の主神となります。イナンナの場合とは異なり、本人は冥界に下りませんが、冥界に下った者（自分の娘ですが）を帰還させ、自分自身がカルト宗教の主神となっていた。

古代エジプトにイシスという女神がおります。これもエジプトのカルト的宗教の主神とされます。夫はオシリスという有名な神です。オシリスは弟セトの策謀に遭って殺され、14の部分にばらばらにされてしまう。イシスはそれを

(一つ足りなかったのだが) 集めてきて、包帯にくるみ、呪文を唱えて、冥界でよみがえらせた(プルタルコス [柳沼重剛訳] 『エジプト神イシスとオシリスの伝説について』 岩波文庫、1996年)。イシスも、冥界を使って主神となっていきます。

この女神の宗教は、数千年たってから、ローマでカルトとして禁止されます。人々が非社会的な行動に走り、暴力的、破壊的な活動に走るということで禁止されます。これはデメテルと似ています。結果的に冥界を利用して、自分が主神となる。それもカルト的な宗教の主神となっていくということです。

1.3. オルペウス

続いてやはり古代ギリシアのオルペウスを取り上げます(アポロドーロス [高津春繁訳] 『ギリシア神話』 岩波文庫、1.3.2., pp.32f)。紀元前7世紀のギリシアの詩人で、豎琴の名手であったと申します。幸せの絶頂にあったのだが、ある日、妻エウリュディケが毒蛇にかまれて死んでしまう。それを連れ戻そうと、ギリシアのペロポネソス半島南端にあるタイナロン岬にある洞窟から冥界へと下って行きます。幸いにも冥界でハデスと妻を返してもらう約束を取り付けますが、地上に戻るまで妻の方を振り返ってはならないとの条件を科せられます。これは古事記に似た話が出てまいります。結局のところ、振り返らないという約束を守れませんでした。そこで彼は、妻と別れなければならなくなってしまう。

この伝説はもともと、人間の力では死者をよみがえらせることはできないという教訓を語っていたはずなのです。しかし、その先の話ができていきます。オルペウスは嘆き悲しみ、ギリシアのトラキア地方でいかなる女性からの誘惑も拒んだが、ある日、ディオニュソスの信女と遭遇した際に関心を示さなかったのが、八つ裂きにされてしまった。彼の首は川を流れてエーゲ海に流れ出て、アナトリア半島に近いレスボス島に漂着した。そこで首が予言を始めた。それで、オルフェウスの宗教が始まるという話です。

これも帰還後、自らの意思とは別に秘儀的教えの主唱者とされたという話で

す。つまり冥界が利用されたり利用したりという話がある、ということです。古代オリエントやギリシアの神話において、冥界—異界が、ある意味で支配の道具として利用されていくケースが多く見出されると申せます。その場合、女神は自らの行動で主神となります。男の場合は、割り当てられた立場という違いがあろうかと思えます。イナンナもアメテルも、生産を前提とする植物神・穀物神としての役割が与えられていました。このあたりに、女神や女性性に対して造られたイメージを確認することができようかと思えます。

2. 人間となる帰還

2.1. 『千と千尋の神隠し』（スタジオジブリ、宮崎駿、2001）

以上、述べてまいりましたように、古代の神話で言及される異界は、支配的立場に立つ根拠として使われるケースが目立ちます。しかし最近のファンタジーにそのような筋立ては見られません。この章の表題は、「人間となる帰還」とつけました。ファンタジーを見ていきますと、人間としての意識を深めていく話、あるいは人間として成長していく話、そういうストーリーを見ることができます。ここでは、『千と千尋の神隠し』と『ピノッキオの冒険』を紹介したいと思います。この中にはもちろんどちらも見たという方がいらっしゃると思います。

『千と千尋の神隠し』は、2001年の作品です。今回の講演準備のために、本当に17年ぶりでDVDを見ました。こういう話です。スタートは、小学生である千尋の一家が自動車で引っ越しをするというのです。荷物はトラックで運んでいます。千尋は前の学校や友達の方がよかったと言います。そうする内に、高台に新しい家が見え始める。なのですが、父親は自動車が大好きな人と見え、アウディを駆って、どんどん山道に入って行って、それで例のトンネルがある建物の前で止まる。そうして千尋がとめるのも聞かないで、両親はそのトンネルをどんどん入っていく。それが異界の入口です。千尋も置いて行かれないよう、母親の腕をつかみながらついていく。母は「そんなにくっつかないでよ。歩きにくいわ」。そしていろいろな出来事が起こっていきます。

作品中で千尋は名前を失い、辛い思いをします。両親は異界の食べ物を勝手に食べ、豚になってしまう。これは先ほどのギリシア神話でもそうでしたけれど、冥界の食べ物を食べたら一応帰ることができなくなる。千尋がいろいろと働きかけて、両親は人間に戻ることができ、もう一度トンネルを通ってもとの世界に戻っていきます。帰日も千尋は母親の腕をつかむのですね。すると、母は「そんなにくっつかないですよ。歩きにくいわ」と、同じ調子で申します。千尋はどちらも腕を握ってるのですけれども、帰りはですね、終結部では出たところで手放すのですね。自立の物語だと思います。

トンネルから出てみると、自動車がほこりをかぶっていて、長い時間の経過が暗示されます。アウディが大好きだったのに、ほこりをかぶっている。父親は気づいていませんから、短時間にほこりをかぶったことを怪訝に思う。千尋はもはや帰りたいとは発しない。成長した、と。それから一家は新しい家へと向かっていきます。

千尋は当初は引越しが嫌だと思っていた。異界へ行き、いろいろな経験をし、本来の現実の世界へ力強く戻っていく。母の腕をつかんでいた子どもが、腕を放して歩み出す。こういう、本来の生活の場に戻る、現実へと向かい合わせる異界。これが『千と千尋の神隠し』の中に出てくるモチーフかなと思います。とにかく最終的にはトンネルのこちら側で生きていく、生き抜いていくしかないということですね。わたしは、これはたいへん宗教的な作品だと思います。宗教というと神信仰、神を信じる、超常性を身につけるというふうに思いがちです。神に寄りかかって生きていくことが信仰かと思いがちです。しかし聖書に「神を見た者は一人もいない」（新約聖書・ヨハネ第一の手紙4章12節）と書かれているように、神は実は非存在の存在。そういう意味では、神を信じるというけれど、自らが独り立ちすることが重要となるわけです。神探求の逆説性と申せます。その点で、彼女は神の世界へと入っていったかもしれないけれど、自分で生きていく、自立することを決心して現実の場へ戻ってきたという意味で、宗教的な作品であると、特に聖書的な意味の宗教的な作品であると思えます。またここに、共有すべき真理を見出せようと考えます。

2.2. 『ピノッキオの冒険』

『ピノッキオの冒険』のどこに異界があるのか。大魚に呑み込まれる場面です。一応「クジラ」ということになっておりますが、それは多くの人がディズニーのアニメーションでピノッキオを見ているので、そうすり込まれているだけです。これはイタリアの作家カルロ・コッローディ（1826-1890）による原作ではクジラではなく、サメともシャチとも、とにかく大きい魚と書かれています。大きい魚から出てくるというので、ピノッキオの話も異界を含むファンタジーに分類します。

これは、先ほど申しましたように、ディズニーの原作ではありません。もともとはカルロ・コッローディの連載が単行本化されたもので、1883年出版、36章からなる作品です（大岡玲訳、光文社古典新訳文庫、2016年）。イタリアは国の形はできていた時代だが、中身のなかった時代。コッローディは教育の問題を考えるために、この作品を書いたというのです。彼自身は神学校に通っていたというだけあって、キリスト教的な、聖書的なモチーフが満ちている作品です。

木からつくられた人形の冒険物語であると。そして、その成長と自立の人間形成史というわけですが、もともとは話す木があったというのです。老人で子どものいないジェppetがそれを買ってきて、操り人形をつくって子どものかわりにしようと思った。話したり動いたりする人形になったというわけです。老人は、何とかこれが人間になってほしいと願った。仙女が、しっかりと教育を受けたら人間にしてあげましょうと約束する。これはそのままですね、教育を受けたら人間としましょう、と。老人は一張羅の服を売って、そのお金をピノッキオに渡し、通学の準備をさせます。しかしピノッキオはそれを持って遊びに行ってしまう。

このあたり、脱線しますけれど、まず父親に当たる人が木工職人である。これはイエスの父は木工職人ですから、聖書との接点がある。それから、もらったお金で遊びに行ってしまうというあたりは、福音書でイエスが語る「放蕩息子」の譬えに似ている。このように聖書のモチーフがたくさん出てくる話で

す。ピノッキオは何度も何度もだまされ、それからコオロギやカタツムリといった小動物—いと小さき者が出てきても、ブチュッと潰したり、無視したり。これらは良心の声なのですね。しかし良心など、いともたやすく無きものとされてしまう現実が暗示されます。そういう態度ですっといく。

彼はアホウの国へ行ってだまされます。この辺はディズニーのアニメーションには出てきません。ディズニーでは、醜いところ、残酷な場面、苦しい状況は取り上げられていないのです。彼はアホウの国で、キツネとネコに、もっている金貨をここの土地に埋めれば何千倍にもなると言われ、指示されたとおりにして一晩待つと、掘り起こされて持ち逃げされます。ちなみに、金貨を埋めるといっても、聖書に出てくるモチーフです。

働きバチの国で、ピノッキオは空腹のため、パンを一つ欲しいと言う。すると、五つあげるからここからここまで働いてくれと返答が来る。ただではあげないのですね。五つもいらぬのです。言うなれば、必要以上の報酬のために余分に働かされる。何かこの働きバチの国は、働かざる者食うべからずという冷たさがある、と。

そして、最後はおもちゃの国です。これはディズニーのアニメーション映画にも出てきます。子どもたちは、楽しくて遊びほうけてしまう。魔法をかけられ、やがてはまず耳がロバのようになり、最後は全身がロバになってしまう。そうしてピノッキオはサーカスに売られてしまいます。最初は少しばかり上手に芸をやれるのですが、足の骨を折ってしまう。サーカスの主人は、このロバは食べるだけで芸はもうできないと判断し、ロバのピノッキオを売ってしまう。折良く太鼓が欲しいと思っていた人が、好都合にも良質な皮が手に入るといふことで、ピノッキオであるロバを購入します。そして残酷にも海に沈め、そのロバを殺そうとします。ところが、うまいぐあいに水の中に沈められている間に魔法が解け、ピノッキオはロバからもとの操り人形に戻ります。それで今度は泳いで逃げていきます。実はジェットは二年ほど前、いなくなったピノッキオを船に乗って探していたところを大魚（サメ）に呑み込まれていました。今回はピノッキオも同じ大魚に呑み込まれ、腹の中で再会するのです。

どうしてジェットペットが魚の腹の中で何年も生きることができたのか—ファンタジーだからいいのですけれども、そのときは、実は魚が大きい船をそのまま呑み込んだため、食料には困りませんでした。しかしピノッキオを呑み込んだのは、最後のろうそくを使っているときでした。二人は大魚のくしゃみで口があいたときに脱出します。そのときにピノッキオはジェットペットを背負って出ていきます。恐らくこれは、十字架を背負うというモチーフの転用でしょう。背中に負って出ていく。このようにして隣人のことを考える者となっていく。それから、病気になった仙女様を見舞う。ロバになった別の友達の悲しみを共にする。このような隣人に配慮する者となって、最後、ピノッキオは人間になっていたのだというストーリーです。こうして異界から帰還し、もう一度父の家での生活が始まってまいります。

異界から出ることで人間となる。単なる人間ということではなく、成熟した人間となっていく。これが、先ほどの冥界とか冥界性というのを利用して支配する者となっていくというモチーフとは対照的な性格であると申し上げられます。そしてそれが作者の考える共有すべき真理と解せるでしょう。

千尋にせよ、ピノッキオにせよ、就学年齢で成人前の、中性的な扱いであることにも注意を注ぎたく思います。ドイツ語で成人前の少女は、ダス・メットヒェン（das Mädchen）と中性名詞となることも重なりを覚えます。共有すべき真理について、性差を超えた担い手を提示していることには大きな示唆があると感じます。

3. 帰還と欠落の認識

3.1. ヤコブ

第3章では聖書のお話をしたいと思います。ヤコブとエリヤの話です。「帰還と欠落の認識」という表題をつけましたけれども、異界に行くというよりも、日常的な異界性と遭遇する中で、自分の欠落を知って別の人間、新しい人間になっていくというストーリーです。

まず、ヤコブという人の話は創世記25章19節から35章にかけて書かれていま

す。ヤコブはイスラエルの父祖で、アブラハムの孫、イサクの息子にあたります。そのヤコブに12人の子どもがいて、これがイスラエルの12部族となりました。

このヤコブは3代目ということになります。だいたい3代目というのは悪い人として描かれる場合が多いといえますね。初代は一生懸命財をなし、2代目は父親の苦勞を見て育ち、一生懸命頑張る。対して3代目は生まれたときから立場が確立していますから、あまり努力しない。3代目のヤコブも、ずるい人間として描かれています。このヤコブ（ヤーコブ）という名前は、もともとは動詞アーカブの三人称単数男性形です。アーカブは、名詞形にすると「足」という意味ですが、動詞にすると、なぜか「足を引っ張る」という意味になります。ですから、ヤーコブは、「彼はアーカブする」、つまり「彼は足を引っ張る」という意味です。端から、悪い意味です。

少々脱線しますが、例えばヘブライ語の「根」という言葉ですね。それを動詞にすると、なぜか「根絶やしにする」という意味になる。何でそうなるのかよく分かりません。なぜ根つくとならないのかと思うのですが、このあたりはユダヤ人の屈折した精神が反映しているのかなという気がします。「足」も、動詞にすると「足を引っ張る」となる。ヤコブは、実は他人の足を引っ張るやつである、と。

彼にはエサウという名の双生児の兄がおります。エサウの足をいつも引っ張る人でした。双生児ですから、エサウが最初に産まれて、その後、ヤコブが産まれる。そのときに、ヤコブは頭ではなく、手から出てきたというのですね。エサウの足を持って、足を引っ張って出てきた。そこでヤーコブと名づけた。

そういう足を引っ張るようなことが何度か重なりまして、彼は兄と不仲になります。この時代、当然長男が家督を継ぎますから、ヤコブは残念ながら家を出なければならなくなってしまい、叔父ラバンの家に厄介になります。ヤコブが家族と住んでいたユダヤの地からメソポタミアまで行きます。ここでもヤコブは人の足を引っ張るような、出し抜くようなことをします。例えば彼はラバンの小家畜の世話をしているのですけれども、身体の模様がまだらの家畜が生

まれたら自分の所有にと願い出て、最初からそういう交配をさせる。ラバンとの関係は決定的に悪くなりました。ヤコブは、ラバンの娘など四人の女性と結婚しますが、結局ラバンのもとで暮らせなくなり、夜逃げ同然で逃げ出してしまいます。

そうして、もう一度帰郷せねばならないのですけれども、兄のエサウと再会し、和解しなければなりません。これまで兄に不義理を尽くしてきましたから、どういう顔で再会するのか、悩みます。それが旧約聖書・創世記32章のテキストです。

ヤコブはとりあえずヤボク川というところまで来て、夜起き上がって、家族と家畜を先に渡らせませす。自分はもう一度、対岸に戻り、一晚を過ごしますが、そこで一人の人と格闘する。ここは語呂合わせになっています。「起きる」は三人称単数男性形未完了形動詞でヤーコム、同様に「渡る」はヤーバル、「組み討ち」はヤーバク。ヤコブがヤボクで、夜になってヤーコムし、川をヤーバルさせ、誰かとヤーバクした。それはともかく、彼は一人でも対岸で夜を過ごした。夜半に彼はある人——これは言い伝えでは神と言われますが、ヘブライ語では、「人」を表すイーシュという単語が使われています。ある人と夜明けまで格闘した。その人は、ヤコブにうまく勝てないと思い、禁じ手と申しますか、腿の関節を外した上でヤコブを祝福し、去っていった。太陽が上ったときヤコブは腿を痛めたため、足を引きずっていた。この足を引きずるといのは、もちろん象徴的な表現であるということがお分かりいただけると思います。足を引っ張った者が自分の足を引きずっていた、足が不自由になっていた。

自分自身、他者の足を引きずらせた者が、実は自分が足を引きずる者であると、不自由であるということに気づいた。このヤボクでの格闘が、異界に当たると考えます。もしかしたら、これはわたしたちも日常生活の中で体験する異界であるかもしれません。そこでヤコブは、重荷を負う自分自身を、新たに発見していったわけです。

そうして彼はエサウと再会します（創世記33章）。エサウから一緒に行こうと呼びかけられますが、ヤコブは、子どもたちはか弱く、家畜も無理できない

ので、「わたしは彼らの歩みに合わせてゆっくり進みます」と返答します（創世記33章14節）。本当は一緒に歩きたくなかっただけかもしれないのですけれどね。「ゆっくり」はヘブライ語でアトという単語ですが、ゆっくり行きますと返事をします。今まで人を自分のペースに巻き込み、どんどん急がせ、引き回していた人物が、他者の歩みに合わせて進むようになっていった。ここも異界が欠落を自覚させ、その人の人間的な成長に寄与していく、新しい人間となるストーリーとして読むことができます。

3.2. 預言者エリヤ

そしてもう一つ、預言者エリヤの物語も紹介いたしたいと思います。これは、旧約聖書の列王記上17章から19章、それから21章に書かれています。メンデルズゾーンが『オラトリオ・エリヤ』という有名な作品をつくっております。これは一応、列王記上17章から19章までをメイン・テキストとしています。

舞台は紀元前9世紀の北イスラエル王国です。この時代イスラエルは南北に分裂していました。北イスラエルと南ユダヤが争っていました。南はダビデ王朝といって、エルサレムを中心とする比較的安定した王朝が維持されてきました。北イスラエルは、200年ほどの間に20人以上、王が誕生しては消えていったという政情不安定な王国でした。そのため北王国は、いつも周辺の国々と妥協的な協調関係を保たねばなりませんでした。周辺とはフェニキア、この時代はアラムと呼ばれたシリア、現代のヨルダンにあたるアンモン、モアブなどです。これらの国々では、バアル宗教という農耕神を奉ずる宗教が主流でした。ユダヤは聖書のヤハウェ宗教です。乱暴に分類すれば、生産性を強調する宗教と、隣人愛を語る宗教です。バアル宗教というのは農耕民の宗教ですから、とにかく作物が実らないと意味がありません。フェニキアにせよアラムにせよ、バアルにもいろいろなバアル祭儀がありました。これを言い出すと仏教もキリスト教もいろいろな宗派・教派があるように、バアル宗教にも実はいろいろな系統があって、土地土地で厳密には異なります。

そういうことですので、北王国は結構あちらこちらの国々から振り回される

ことになります。あるときフェニキアのティルスという都市国家から王女イゼベルを息子の嫁に迎えます。フェニキアとの政略結婚ですね。それに伴って、フェニキアからはバアルの祭司を400人、関連するアシェラの預言者を450人、合計850人を招き入れたと記録されています（列王記上16章31-33節、18章19節）。現代日本に暮らすわれわれは、宗教家を招いた程度に思いますが、宗教家というよりも、日常生活を支える側近や官僚という方が実態に近いと思えます。場合によったらガードマン、軍隊にもなります。

エリヤという預言者は、この北王国で活動しましたが、自立性の喪失を憂い、その状況を批判します。先ほどの『ピノッキオ』におけるコオロギやカタツムリと同じではありませんけれど、北王国の女王イゼベルと王アハブは、エリヤを本当にブチッと潰すように追放してしまいます。他のヤハウエ預言者も絶滅します。エリヤは干ばつの預言を残して亡命しますが、やがて北王国に戻り、バアルの預言者と祭儀をもって戦いを挑みます（列王記上18章20節以下）。お祈りをして、火が降ってきたほうが勝ちだという闘争をします。エリヤが祈ると天から火が降ってきて、バアル宗教にヤハウエ宗教が勝った、と。これが18章までのストーリーです。

ところがそれを聞いたイゼベルが怒り、エリヤを迫害します。エリヤは北イスラエルのカルメル山から再び逃走し、南方のホレブ山まで逃げる。ホレブ山はシナイ山の別名です。ここで彼はバアルの預言者らと戦ったときは別人のように弱々しくなって、洞穴に潜みます。これが「異界」と呼べるかと思いません。そこに神が洞穴から出てこいと告げます。彼が出ていくと、イスラエル再建という新しい使命の委託を受けます（列王記上19章）。エリヤは洞穴、すなわち異界を出て、新しい人となる、と。洞穴から進み出て、新しい人間となっていくと。

その後の列王記上21章で、エリヤはもはや祈りによって火を降らせるとか、超常的な行為は行いません。他者の精神的、肉体的、社会的な痛みに寄り添う人間として活動していくようになります。ここも新しい人間となっていくというふうの説明することができようかと思えます。

ここでの異界は、聖書の場合、神との出会いというふうに説明されると申せますけれども、しかし、われわれの暮らす世界が全てではないと言おうとしています。われわれがいま、手を触れ、五感をもって暮らしているこの世界が全てではないのだと。登場者は明確に男性ですけれども、われわれの世界に限定されないという主張に、性差を超えた出来事を読み取れると考えます。

4. まとめ

最初に、神話は、共同体で共有された真理の伝達に貢献する物語、人々の間で共有された真理を分かち合う容器であると申しました。「共有された真理」については、隣人愛と言ってもよいし、真っ当な人間となることと言えるし、いろいろな言い方ができると思います。古代の神話や現代のファンタジーには、冥界や異界が、共有された真理を伝達する器として機能していることが確認できたかと思います。

まずイナンナやデメテルの話を取り上げました。古代宗教で神官は基本的に男です。古代語でもだいたい男性名詞です。またシュメールなど、古代メソポタミアの遺跡から出てくる神官像も、だいたい男です。体の特徴から男であることがわかります。すると男がイナンナやデメテルといった女神を利用して、支配の道具を得ていたと見ることができます。ストーリーの上では、自ら冥界より帰還して支配者となるパターンも、冥界から帰還した者を利用するケースもありましたが、結局のところ多くの場合、女神も男の神官によって支配の道具とされていたということです。繰り返しとなりますが、男が女性性を利用してきた歴史というのは、確かに見出せ、指摘されます。このような、他者を支配する契機としての異界認識があります。

他方に自分自身を解放していく異界との出会いも確認されます。これは第2章や第3章で取り上げた作品群です。明らかなコントラストとしては、支配するための異界と、隣人との和解、あるいは自分自身と和解して生きていく道を示すための異界。そこでは利用し、利用されるという関係ではなく、性差を超える登場者や場面設定が用意されていたと思えます。

わたしたちの現実の中にもいろいろな異界がございます。マスコミで大学の運動系クラブのことが話題となりました。外界から観察すると驚くしかない上意下達の社会ですが、これもある種の異界と評せるかもしれません。そこには、本日述べました支配の道具としての異界を指摘できるのではないのでしょうか。もちろん、生活の隅々まで支配され、マインドコントロールを受けている状態とも思えますから、ルールを逸脱した人を頭から非難だけして問題終わりとはできませんが、やはりわたしたちが、人間を解放していくものとしての異界との出会い方を日常の中で意識することが肝要なのだと思います。

本日は、古代の神話や最近のファンタジーからもそれを考えるきっかけとならないかというささやかな問題提起をさせていただきました。雑駁な話で申し訳ございませんでした。異界が、神話の中で、支配の道具として用いられ、また人間解放の機会ともされていた。利用される性もあり、他者への奉仕―利用されることをよしとする生き方への気づきということもある。現代に生きる者として、人間を縛る異界ではなく、解放する異界を考えていきたいと思いません。

まだ選挙運動をしているときのバラク・オバマが宗教の話の中で、こういう意味のことを申します。イスラーム、ユダヤ教、キリスト教、お互いの悪口を言い合うのはやめよう。それよりもそれぞれが、どのような信仰者を理想とし、目指しているのかを考えようではないか。それを評価の対象としよう。

こういう異界のストーリーも、何をわれわれに語りかけているか、またよくない側面があるとしたら、われわれがそこから何を教訓として学びえるかを御一緒に考えていくことができたらと思ひ、結論のある話ではないのですけれども、話題提供をさせていただきました。どうもありがとうございました。

○司会 どうもありがとうございます。少し時間がございますので、もしよろしければ、フロアから少し質問などいただいてもよろしいでしょうか。

○飯 はい。

○司会 先ほどピノッキオの話で、ジェットペットじいさんを背負って出るとい

うときに、背負うというのが十字架だという話、わたしとても印象的だったんですが、先生はそれはやっぱりそういった神学的な背景として、かなりそういう事例をたくさん御存じでいらっしゃる……。

○飯 以前に見ましたフランスとベルギーの合作映画で『息子のまなざし』という作品からも、同様の示唆を受けたことがありました。2004年2月に公開された作品で、先日亡くなった本学の元教授・村上直之先生に紹介していただきました。普通の人であっても憎む人を受け入れられるかという主題です。主人公は木工職人で、職業訓練所の教師です。息子さんがある少年に殺され、たいへん苦しい日々を送る。すると犯人の少年が少年院を出てその訓練所に来て、よりによって自分の弟子となる。その職人にとって、少年は期待した通りに更生したとは思えない。少年の方ももちろん職人が自分の殺めた者の親だとは知りません。両者の間では幾度もやりとりがあり、職人は展望が開けたり、失望したりを繰り返す。しかし最後は、少年が一人で運ぶべき5メートルもあるような木材と一緒に持ち上げるところで唐突に終わります。わたしはこれが、フランスやベルギーといったキリスト教文化圏では、主人公がイエスの父と同じ仕事の木工職人、テーマが許すこと、そして木を担ぐという場面が出てくると、反射的に、職業病で、聖書のモチーフを採用していると思ってしまう。そういうシーンを思い浮かべました。

○司会 それが職業病なのか……。

○飯 今のは冗談で言ってるんですよ。

○司会 いやいや、そのヨーロッパのキリスト教の文化圏の中では、ある意味共通理解の、言わば常識に当たる……。

○飯 それはそう思いますね。だから木を背負う—ジェットットを背負うには、そういった意味合いがあるんじゃないかと思ってますね。

先ほどの、実は反対なんだけどね。ジェットットが木であるピノッキオを背負うというのがそのままなのですが、木であるピノッキオがジェットットを背負う。それがひっくり返ったところに、神やイエスではなく、われわれ人間が、それぞれ置かれた場で木を背負う、十字架を背負う、他者の重荷を

背負うというキリスト教の基本的な倫理を読み取れるのではないかと
思って、そう申しました。

しかし、カルロ・コッローディがそういう具合にどっかで書いているとい
うことではないです。日本でも青山学院女子短期大学で学長を務められた前之
園幸一郎先生がピノッキオについて、キリスト教文化との関係を論じておら
れます（『『ピノッキオの冒険』とキリスト教的文化の伝統』『青山学院女子
短期大学総合文化研究所年報』第9号（2001年）、pp.45-74）。CiNii でヒッ
トした論文ですが、そこからもヒントをいただいています。とはいえ、作者
本人がそれを書いているかどうかは知りません。ただ、コッローディ自身が神
学校で学び、作品中に多くの聖書の物語素材が用いられていますから、可能
性は高いと思います。

○司会 ありがとうございます。ほかによろしいですか。

じゃあ、きょうは本当にありがとうございました。